いま描きなおされる心性の歴史絵巻

武田　雅哉

李孝悌著／野村鮎子監訳　和泉ひとみ　上原徳子　竹田治美　辜知愚　高尾有紀訳
恋恋紅塵　中国の都市、欲望と生活

A5判　552頁
東方書店
［本体 5,000円＋税］

本書を読みながら、ジョナサン・スペンスの『ある農婦の死：十七世紀、中国の現実と夢幻世界』（山本英史訳、平凡社、一九九〇）を思いだした。これは『郯城県志』や『福恵全書』そして『聊斎志異』などの資料を読みこんだうえで、山東省のある町で生じた名もなき女性の生と死を物語ふうに描き出したもので、中国ジェンダー研究の先駆けとなった著作である。カルロ・ギンズブルク『チーズとうじ虫』やロバート・ダーントン『猫の大虐殺』などに代表されるマイクロヒストリーのおもしろさを堪能させてくれた快著だ。

李孝悌の『恋恋紅塵』は、序や解説を除くと、全部で九章から構成されている。二章から九章までが李氏の論文だが、あつかっている時代もテーマも多岐にわたる。

「明清文化史研究の新課題」と題された第一章は、最後に読んでもいいかもしれない。これは、「明清の社会生活」という研究プロジェクトの成果として李氏が編集した『中国的城市生活』（聯経出版有限公司、二〇〇五）と題する論文集の梗概になっている。旅行、黄鶴楼、蘇州の道、北京の水など、いずれも興味深いテーマに挑んだものばかりだ。

第二章「桃花の扇もて南朝を送る――断裂した逸楽」では、孔尚任の戯曲『桃花扇』が主役である。この作品は、明末を舞台に、復社に属する文人侯法域と南京の名妓李香君の恋愛を、復社を弾圧する敵役阮大鋮らをからめながら描いたものだ。明から清へ――この時代をいかに生きるべきかをひとつのテーマとしたこの戯曲を、本書の著者は「壮大で完璧な政治史の物語」であるとして、その舞台となっている金陵に特有の都市景観、特に秦淮河を隔てて向かい合う貢院と妓楼が

林立する旧院の記憶を提供していると言う。それはおのずと、才子と佳人が出会う場にほかならなかった。著者は『桃花扇』をめぐる虚と実の世界に属する男女の運命を縦横に紡ぎながら、明末南京の心性の記憶を、読者に追体験させてくれる。

第三章「冒襄と水絵園の遺民世界」と第四章「儒生冒襄の宗教生活」は、明末の四公子の一人とされた文人冒襄をめぐる世界を描写する。冒襄は、明末に副貢となるが、清朝には仕えることをせず、『桃花扇』の敵役である阮大鋮を罵倒したことでも知られる。水絵園という私園を整備して修禊（みそぎの名目で開催される宴）をおこない、文人たちと広く交わった。また秦淮の名妓董小宛を妾とし、若くして世を去った彼女のことを綴った「影梅庵憶語」を残している。二人のラブロマンスは、何度も映画化されているほど知られている。著者は、宴会や戯曲の観賞が頻繁に催された水絵園こそは、後世の人びとの記憶の中で、冒襄その人の隠遁の代名詞であり、悲哀に満ちた遺民の心情を反映するものにほかならないとしている。

つづく第四章で謂うところの、冒襄が体験した宗教的な体験とは、関帝のおみくじを引いたときに出た籤詩が、みずからの人生の起伏を言い当てていたこと、家族の生死に関わる不思議な符合、そして夢の啓示を指す。著者は、冒襄に代表される十八世紀の文人・儒生の日常が、さまざまな媒体による占いを通じて、神秘的なものへの認識と密接に結びついていたことを明らかにする。

第五章「士大夫の逸楽――揚州時代（一六六〇～一六六五）の王士禛」は、官員と詩人を往還して生きた王士禛の生き方のディテールを、「逸楽」をキイワードにして探り、士大夫の「文化」とはいったい何を指すのだろうかと問いなおす。王士禛は、冒襄が催した水絵園での修禊にも参加している。

第六章「袁枚と十八世紀中国の伝統における自由」の主人公は袁枚である。みずから「私はふだん趣味が少ない」とうそぶいてはばからない、この徹底した趣味人が、専制的で抑圧的なイメージのある十八世紀の統治の中で、意外にも相応の自由を満喫し、情欲を礼賛していたことを明らかにする。さらにその志怪の書『子不語』にうかがえる夢や降霊術などの神秘世界との交流を取りあげて――このあたりは第四章で触れられた冒襄の神秘世界とも関わるが――かれらには礼教の言説に干渉されない、それなりに自由な私的領域が約束されていたことを主張する。この章の末尾において、著者は、「二十世紀中国の自由主義には、伝統が具有していたある種の寛容さが欠けていることがよく見えてくる」と付言するが、なるほどと思った。これは、ひとり中国にとどまらぬ問題として、傾聴にあたいしよう。

第七章「十八世紀の中国社会における情欲と身体――礼教世界の外のカーニバル」では、『霓裳続譜』『白雪遺音』なる情歌集と、戯曲集『綴白裘』を用いて、多様な「情欲世界」へのめくるめく冒険が、ミハイル・バフチンを援用しながら試みられる。歌合戦さながらに、次から次へと投げつけられる情歌を観賞しながら、そのカーニバルの末席に潜入し、楽しませていただいた。日本語への翻訳もさぞやたいへんだったことだろう。そこにエロチシズムや哄笑が満ちていることは言うまでもないが、著者は、しばしば笑いの対象が人の身体的欠陥に向けられることにも言及する。現代人の目には、このような笑いは一見「残酷」ではあるが、それが単なるからかいや揶揄ではなかったことについても、さらに深く考察すべきであることを提言する。このあたりは前章で触れられた、寛容さをめぐる問題にも通底しているだろう。

第八章「都市での彷徨――鄭板橋のうたかたの人生」の主人公である鄭板橋は、晩年、袁枚とも出会っている。本章では、鄭板橋が「主流であった学術や思潮以外に、富裕な都市生活にも多くの可能性があったことを見せてくれている」として、揚州における鄭の生活にうかがえる複雑な様相を描述する。

第九章「上海近代都市文化の中の伝統と近代――一八八〇年代から一九三〇年代――」では、近代中国に入り、絵入り新聞『点石斎画報』、「新舞台」における改良戯曲、そして写真雑誌の『良友画報』が俎上にあげられる。これら三者は、半世紀にわたり、上海の人びとの目玉に刺戟を与えつづけてきたメディアであった。本章の考察から導かれた結論は、新しい瓶には必ずしも新しい酒は入っていない、その逆もまたしかり、といったところであろうか。

本書を、一章また一章と読みおえるたびにあれこれ妄想したのは、「だれか、この本をモチーフにして小説を書かないかなあ」というものであった。しっかりした世界観によって綴られた論説は、それだけで物語を奏でてくれる。考察のターゲットとされた人物たちは単なる研究テーマであることを超え、血肉のある人間として、期待していた以上のことを語りだす。

本書は数篇の学術論文によって構成されているが、それらは完全に独立したものではない。ひとつひとつの論文は、時代をおって、ゆるやかにリンクする関係を保ちながら、次から次へとテーマをバトンタッチしていく。全体を通してみれば、一冊の長編エッセイといってもいいだろう。その流れの中で、個人的に興味深かったのは、冒襄、王士禎、袁枚ら清代の文人たちの、神秘体験や怪奇現象に対する強烈な関心である。清代文人の理性的な面ばかりを見ていると、たとえば

袁枚の『子不語』や紀昀の『閲微草堂筆記』に綴られた膨大な奇譚との関係がよくわからない。李氏が言うように「このような道徳的で理性的な儒学の言説の背後の、不道徳で非理性的で神秘的とみなされている顔――逸楽や宗教は、私たちが明清士大夫の文化や思想を検討している時には往々にして隠れて見えず、故意に消されてしまうことすらある」（二一頁）。理性と非理性とが一個の人間の中に矛盾なく同居している様相を、本書は教えてくれるだろう。いかなる地域、いかなる時代を切り取っても、その世界は一枚岩ではない、それは特定の人物についても同様であるということだ。

いまこの筆をとりながら、スペンス『ある農婦の死』の台湾版『婦人王氏之死』（麦田出版、二〇〇一）を手にして、その「校訳」の任にあたっているのが李氏であることを知った。なるほどと納得した次第である。李氏はその「代訳序」において、スペンスの書を「文学的な叙述に重きを置き、高度な叙述のテクニックと研ぎ澄まされた感知の能力によって、硬化した史料の背後に、過ぎ去った時空と人間の生命とを新たに描き出し、あるいは捉えようとしたものである」と評している。李氏の著作は「文学的な叙述」に走ることには、なおまだ禁欲的だが、研究の姿勢は、まさに軌を一にしていると言えるだろう。李氏はハーバード大学のフィリップ・キューンのもとで学んだという。キューンといえば『中国近世の霊魂泥棒』（谷井俊仁・谷井陽子訳、平凡社、一九九六）という、めっぽうおもしろい本の著者だが、これまたなるほどと思わせる。

台湾版の原書には全部で五五点の図版が掲載されているが、欠点をひとつあげるとすれば、甚しく不鮮明なものが多いことだろう。いまや「図像」を冠した本が山ほど刊行されている中国だが、図版に対する扱いの残酷さは、なかなか改善しないようだ。今回の邦訳では、諸事情により掲載不要と考えられたものが削られ、図版は三九点に減らされてはいるが、不鮮明な原書の図版は、おおむね鮮明なものに換えられている。

時間的には、明末から清末まで、つまりは清朝全体を俯瞰する視野のもとに綴られている本書を通読することで、われわれの頭のなかに刷り込まれた教科書的な「ステレオタイプの印象」は小気味よくぶち壊され、読者の脳裏には、いまひとつの心性の歴史絵巻が鮮やかに浮かびあがってくるだろう。

なお、『中国21』Vol.50（愛知大学現代中国学会編、東方書店、二〇一九年三月）には、大平桂一先生（大阪府立大学）が書評を発表しておられる。あわせてお読みいただきたい。

（たけだ・まさや　北海道大学）